

Adventures of Huckleberry Finn は どのように描き直されてきたのか

— コミック／グラフィック・ノベル／マンガ形式の分析 (1)

ぬま た ち か
沼 田 知 加

はじめに

アメリカ図書館協会の統計によると、Mark Twain の *Adventures of Huckleberry Finn* (1885年、以下『ハック・フィン』と記す) は2000年～2009年の10年間で、学校のカリキュラムや図書館から排除するよう求める申し立てのあった書物の14位に位置している⁽¹⁾。図書館協会では1990年から統計を取り始めており(1990年代は5位)、『ハック・フィン』は常に閲覧制限や禁書扱いされる可能性のある書物であった。2019年が終わろうとする今、果たして2010年代の結果がどうなるのか気にかかる。1990年～2018年までのトップ10とその理由を列挙したもう少し詳しい統計を見てみると、2002年は7位(理由: 乱暴な言葉使い)、2007年には5位(理由: 人種差別)だが、幸いなことに2010年から2018年まではトップ10入りしていない⁽²⁾。

申し立ての理由である「人種差別」とは、作中で200回以上使われている“N-word”つまり“nigger”という表記を主に問題視する。学校教育の現場で生徒やその家族が、読書リストから外したり、テキストとして使用したりするのを止めるよう申し立てるケースが多い⁽³⁾。申し立ての結果、読書リストやカリキュラムから除外されたり、図書館で閲覧制限がかかったりする。一方で、そのような「検閲」に抗する確固たる試みもある。たとえば、2008年コネティカット州マンチェスター校区で申し立てがあった際、NCAC (National Coalition Against Censorship) は地元紙の問い合わせに答えて、「本を取り除くのではなく、学校はこれらの本の教育的価値を説明すべきだし、カリキュラムに他の教材を追加して、生徒や親が議論する機会を提供すべきである……生徒たちが何を読み、何を学ぶべきか押し付ける権利はどの親にもない」とする書簡を送付した⁽⁴⁾。数週間後、その高校では『フレデリック・ダグラス自伝: ある黒人奴隷の生涯』を追加教材とし、事実とフィク

ションの両方を学ぶことになった⁽⁵⁾。

このように教育現場でしばしば問題となる『ハック・フィン』だが、実は今までも子供たちは小説の形だけではなく、ミュージカル、TVドラマ、アニメ、映画をとおして『ハック・フィン』の翻案作品に接してきただろうし、コミックスやグラフィック・ノベルを手にする機会もある⁽⁶⁾。特に、リテラシー向上を目指して、学校図書館や公立図書館にコミックスやグラフィック・ノベルの収蔵が増えている昨今⁽⁷⁾、小説を読む前に、改変された『ハック・フィン』と出会っている可能性が我々の想像以上にあるのだ。

本稿ではコミックやグラフィック・ノベルで『ハック・フィン』がどのように描き直されているのか検証する。その際、特に『ハック・フィン』のクライマックスである31章とその伏線として機能する16章がどのように描かれているかに着目して考察してみたい⁽⁸⁾。

コミックス・フォーマットで描かれた2つの『ハック・フィン』

1. Classics Illustrated No.19 *The Adventures of Huckleberry Finn*⁽⁹⁾を読む

Classics Illustrated シリーズは、読書習慣が身につけていない子供向けに世界の名作をコミックスに翻案し、原作を読む動機付けをしようという意図のもと、Albert Kanter が1941年～1971年まで出版していたものである。全167タイトル中『ハック・フィン』は19番目にあたり、1944年4月に出版された。本稿で使用するテキストは、2008年にイギリスのClassic Comic Store Ltd.が始めたリプリント・シリーズの一冊で、奇しくもオリジナル版と同じ通し番号19番で2010年4月に初版が出版された。アダプテーション（文字テキストの作者）は不詳だが、イラストはMike SekowskyとFrank Giacoiaである。イラスト担当の二人と同姓同名の人物が、60年代から70年代にDCコミックスやマーヴェルでJustice LeagueやWonder Womanシリーズに携わっているが、彼らと同一人物かどうか確認できなかった。しかしながら、Sekowskyが「1940年代には、コミックスの出版ならば、どのような仕事でも引き受けていた⁽¹⁰⁾」とされているように、それぞれ同一人物である可能性はかなり高い。オリジナル版とはかなり趣が異なる表紙を開けてページを繰ってゆくと、スーパーヒーローが席卷するアメコミ黄金時代（1938年～1956年）真っ只中で出版された、当時の雰囲気が良く伝わる絵柄である。

それでは『ハック・フィン』がどのように描き直されているのか検証してみよう。

表紙を開くと、ハックがダグラス未亡人とミス・ワトソンの監督下で窮屈な生活を送っている様子が、ページ全体を使った一枚絵の口絵によって一瞬で見取れる。5ページでは早くも暴虐なパップが登場し、以下テンポよく物語が進む。パップからの逃亡、ジムとの出会いと筏の旅、川を流れて来た家での（パップの）死体発見、ハックの女装とその顛

Adventures of Huckleberry Finn はどのように描き直されてきたのか 3

末、蒸気船との衝突、王様と公爵による詐欺の片棒担ぎ、売られてしまったジムを取り戻すために向かうフェルプス農場、トムの「ごっこ遊び」に付き合う形で実行されるジム救出劇、ジムが逃亡奴隷でなくなっていた種明かし、そして最後は「インジャン・テリトリーに行こう」というハックの決心を述べ、全47ページで物語は終わる。グレンジャーフォード家とシェパードソン家の宿怨と血生臭い決闘騒動は描かれていないが、一読したところ物語全体の流れは過不足なく押さえられているように見える。

しかしながら、決定的に欠落しているものがある。原著31章で物語のクライマックスを画すハックの葛藤がまったく描かれていないのだ。その理由は、他ならぬコミックス・フォーマットに求められる。

まず、原著31章に該当する部分を実際に見てみよう。



図版 1-1

1コマ目で筏に戻ったハックはジムがいなくなっていることに気づく。筏の上でしばらく泣いたと説明的な叙述のある2コマ目では（コマの中で黄色く塗りつぶされた部分が、吹き出しと対比される「地の文」として機能する）早くも陸に上がり、出会った少年に「この辺では見慣れない黒人に会ったか」と問いかける。3コマ目でハックはフェルプス農場に到着する（原著32章）。大部の物語を47ページのコミックに落とし込むための省略ではある。しかしながら、Ernest Hemingwayが「すべての現代アメリカ文学はマーク・トウェインが書いた一冊の本『ハックルベリー・フィン』から生まれ出ている。もしそれを読むならば、黒人ジムが少年たちから盗まれたところで読むのを止めるべきだ。それが本当の結末だ⁽¹¹⁾」とまで評した、ハックの内省と葛藤はまったく描かれていない。

本書で1ページに収められた一連の描写でまず注目すべきは、ハックが道で出会った少年に“Have you seen a strange negro around?”と問いかけている点だ。原文では“Then I set down and cried; I couldn't help it. But I couldn't set still long. Pretty soon I went out on the road, trying to think what I better do, and I run across a boy walking, and asked him if he'd seen a strange nigger⁽¹²⁾”とすべて地の文で書かれており、ジムの行方を探るために直接話法で尋ねる言葉——後に続く会話のきっかけとなる問い——を、ハック自身は発していない。しかも、差別語として問題視される“nigger”が“negro”に置き換えられている。確かに本書では“nigger”は一度も使用されておらず、“slave”や“runaway slave”に置き換えて、差別語を慎重に回避している。この場面でハックにあえて“negro”と表現させるのは、“negro”が本来“black”を表す言葉であり、「社会的・言語学的な蔑称というよりもむしろ、もっぱら商売上（筆者注：つまり奴隷売買のこと）の文脈で、単に奴隷を指し示す語として使われて来た⁽¹³⁾」経緯を鑑みれば理に適っている。なぜならば、実際にジムは王様と公爵によってフェルプス農場に売り飛ばされたからである。

原著では、少年との会話でジムがフェルプス農場に売られたことを知ったハックは筏に戻り、ワトソン夫人にジムの居場所を知らせる手紙を書く。その後で、果たしてそれが正しいのかどうか内省と葛藤が続き、“I studied a minute, sort of holding my breath, and then says to myself: 'All right, then. I'll go to hell.' [344]”というあまりにも有名なハックの内面の声が発せられる。“talk to myself”は声に出して「独り言を言う」場合に使用するのに対し、“say to myself”は「自分の心に語りかける・心の中で考える」ニュアンスが強い⁽¹⁴⁾。「地獄へ行く」決心はハックの内省の末に出てきたものであり、ハック自身が自分の心に語りかける言葉であるため、“says to myself”となっているのだ。

だが、本書ではこの言葉は描出されない。それはなぜなのか。「地獄に行く」などという不穏な言葉を子供に喋らせたくない、との教育的配慮もあるだろう。しかしそれ以上に、コミックスというメディアが課す制約が理由として考えられる。コミックスでは通

常、矩形に区切られたコマが規則的に並び、物語が展開してゆく。コマの大きさや形が変幻自在で、重なり合ったり、宙に浮いていたり、断ち切りもあるようなマンガ・フォーマットとは大きく異なり、黄金期のアメリカン・コミックスを体現するコマ構成は、アクションや冒険との親和性が高い。逆に、内面描写が延々と続くようでは、コミックス形式を十分に活かすきれないのである。冒険エピソードの集積としての『ハック・フィン』は過不足なく描き出せても、ハックの「良心」をめぐる葛藤はコミックスに乗る絵にならないのだ。

ここでもう一度、先に引用した原文と図版 1-1 を比較してみよう。2コマ目で原文の2つの文章“Then I set down and cried; I couldn't help it.”と“Pretty soon I went out on the road”をうまく取り込む形で地の文が作られ、ハックの発話として“asked him if he'd seen a strange nigger”が処理されている様子はすでに見てきた。“But I couldn't set still long.”と“and I run across a boy walking”は絵で表現されている。先の引用で残ったもう一つの文章——“trying to think what I better do”こそ、ハックの内省と葛藤を予告する文章であり、ハックの考え続ける姿勢を予告している。31章のクライマックスを描く挿絵が“THINKING”というキャプションと共にある事実からも、「考え続ける」ことこそが真に意味を持っていると読み取れる（図版 1-2）。この W. E. Kemble の挿絵では、筏の上で膝を抱えて考え続けるハックの足元に、手紙が転がっている。ハックの視線はその手紙に向けられているように見える。「地獄に行く」決心を吐露して手紙を破り捨てるという動きのある絵ではなく、あくまでも考え続けるハックを絵にしている。一方、コミックでは「考え続ける」という静的な描写は重視されない。そのために“trying to think what I better do”が地の文で説明的に叙述されることもなければ、その後のハックの逡巡が絵や文字で描き出されることも一切ないのである。



図版 1-2

では、Classics Illustrated で目を引く見せ場はどこにあるのか。口絵の一枚絵を除いて、1ページに3コマ~6コマが配置されている本書で一番の大ゴマは、ページの2/3を費やして描かれる蒸気船との衝突であり、図版 1-3 は 16章最後の場面を描いていることになる。

原著 16章の冒頭部では、ハックとジムがオハイオ川との分岐点であるケアロを見逃さないよう、どうやって確認するか話し合う。ケアロはジムを自由へと導いてくれる町であ

る。もうすぐ自由になれると高揚するジムを目の当たりにして、逃亡を手助けしてしまう事実にも恐れ慄くハックの胸に「良心」の問題が浮上する。原著では“*I fidgeted up and down the raft, abusing myself to myself, and Jim was fidgeting up and down past me. ... Jim talked out loud all the time while I was talking to myself. (153-154)*”と、二人の様子が対比的に描写されている。ここで着目すべきは、ハックが声に出して独り言を言っている——“*talking to myself*”——点だ。先ほど見た 31 章の独り言——“*says to myself*”——が深い内省に基づくもので、自らの心に語りかける無音の声であったのとは違う。もちろん 31 章ではジムがそばにおらず、ハックが一人きりであったのに対して、この場面では興奮を抑えられないジム



図版 1-3

ではある。重要なのは、声に出して言う独り言であるために、内省に向かう気配のないハックが顕在化することだ。原著で“*Thinks I, this is what comes of my not thinking. (154)*”とあるように、逃亡奴隷と共に旅をし、逃亡を見逃すどころか積極的に加担してしまう事態がいかに「考えなし」であったかハックは思い知り、「考え続ける」31章の伏線として機能する。「考えなしであったことを考えている」ハックの姿が本書で描かれないのは、31章のクライマックスが描かれないのと同じ理由、すなわち、コミックス・フォーマットでは心のダイナミックな動きを表現し得ないからである。

図版 1-3 の前 2 ページでたっぷりと描かれるのは、ケアロの場所を確認するために一人カヌーで岸辺に向かうハックが、逃亡奴隷を追っている小舟と出会い、機転をきかせて（筏に乗っているのは病気の父親だと嘘をつき）窮地を脱するエピソードだ。ケアロを通り過ぎてしまったことが確定し、ケアロに戻る算段をジムとハックが相談する場面は省略され、窮地を脱出したエピソードに続いて、ただ蒸気船と衝突する場面だけがゴマで描かれるのである。つまり、ケアロに纏わるあれこれを巧みに回避するのは、「考えない／考える」ハックの内面描写を回避するためであり、アクションによって物語を駆動するコミックス・フォーマットの要請に従ったものなのである。

Adventures of Huckleberry Finn はどのように描き直されてきたのか 7

蒸気船との衝突を契機に、ハックとジムはしばし離れ離れになる。先に述べたように、この後に続くグレンジャーフォード家とシェパードソン家の諍いは全てカットされているため、ページを繰るとすぐにハックはジムと再会する。蒸気船との衝突という偶発的な事故が、本書の見せ場として引き立つのだ。

2. *Mark Twain's The Adventures of Huckleberry Finn: The Graphic Novel*⁽¹⁵⁾ を読む

本書の出版社 Campfire はインドに拠点を置いており、グラフィック・ノベル及び子供向け教育書に特化した出版社である。表紙を開くと左ページには原著と同じ告示⁽¹⁶⁾ が掲載され、右ページの扉絵はハックとジムがカヌーを漕いでいる姿を描いた本文中のイラストを借用している。ページをめくると、見開き真ん中には蒸気船との衝突場面を描いた本文中のイラストを、左 1/4 スペースには書誌情報を、右 1/4 には著者 Mark Twain についての説明を掲載している。このような造本のありようを見てみると、Classics Illustrated (以下、本章では CI と表記する) と同様に、本書が蒸気船との衝突を見せ場として絵になるエピソードと捉えていると了解される。さらにページを繰ると、左にはハック・トム・ジム・ハックの父・王様・公爵の人物イラストが一枚絵で紹介され、いよいよ 5 ページから本文が始まる。このページもやはり一枚絵だが、前述した CI がハックとダグラス未亡人・ワトソン夫人との窮屈な生活を描いていたのに対し、前作『トム・ソーヤの冒険』との繋がりを強調しており、この点においても原著冒頭部に沿う形と言える。

本書の書誌情報では “Wordsmith・Illustrator・Colorist・Letterer・Editors・Designer・Cover Artists” とグラフィック・ノベル制作の細分化された役割分担がずらりと並んでいる。“Adaptation” ではなく “Wordsmith” と記されている文章作家の Roland Mann⁽¹⁷⁾ は、後にマーヴェルに買収される Malibu 社で 1990 年代からコミックス編集に関わり始め、30 冊以上のコミックス文章作家としての実績を持つ。大学で英語やクリエイティブ・ライティングを教えた経験があり、2010 年には小説も出している。全 68 ページの本書は CI の 1.5 倍近くのページ数に及び、文字情報も格段に多い。

一方、イラストレーターの Naresh Kumar⁽¹⁸⁾ は Raj Comics で長く勤めた後、現在は Campfire の親会社である Kalyani Navyug Media Pvt. Ltd. のイラストレーターとして同社のグラフィック・ノベルを多数手がけている。彩色の Prince Varghese の詳しい経歴は確認できなかったが、Campfire の他のグラフィック・ノベルにも携わっている。いずれにしろ、本書の絵が伝える趣はアメコミを強く連想させる CI とは大きく異なり、むしろフランスのバンド・デシネに近い印象を受ける。

本稿の 1 で検証した原著 16 章と 31 章を、本書がどのように描き出しているか見ていこう (図版 2-1)。

本書が採用する 16 章最大の見せ場はやはり蒸気船との衝突場面であり、口絵代りの冒頭ページを除いて唯一の一枚絵で表現される⁽¹⁹⁾。本書ではコマ中の四角い囲みに、地の文に当たる説明的叙述が加えられている。この囲みはすべて茶色く変色した紙を模し、上下がギザギザに小さく破れており、古紙の風情を全体的に醸し出す。そのせいもあって、原文の表現とは違うものの、“I guess you could say it had been one of those days.” “I reckon I stayed underwater for a minute and a half.” “I shouted for Jim about a dozen times”などの文字テキストは、大人になったハックが書いた回想という原著の枠組を十分に感じ取らせる。文字量の多さ・コマ配置の自由度・ときに枠線をはみ出して描かれる人物の動きなど、CIとの相違が一目瞭然だが、これらの表現方法は物語の筋の選

択と相互に影響を与え合っている。CIでは省略されていたグレンジャーフォード家とシェパードソン家との諍い（原著 17～18 章）が続く 5 ページで描き込まれ、ある程度時間が経った後でハックとジムが再会する。このような描写の充実具合はページ数と文字量の多さが可能にしたとも言えるが、それだけでは説明できない物語の取捨選択が行われている。どういふことか、蒸気船衝突場面の直前ページまで戻って検証してみよう（図版 2-2）。

ページ上部でカヌーを漕ぐハックとジムは、本書の扉で使われていた図柄である。蒸気船との衝突を描いた一枚絵とともに、本書を開いた読者が最初に目にするイラスト二つがこの一連の流れから採用されており、絵画表現上の見せ場としていかに重視されているかが読み取れる。しかしながら実は、本書 23～24 ページで描かれているエピソードは原著では同じ夜の一連の出来事ではない。ハックとジムの背後に見える沈みかかった船を見れば明らかのように、原著 12～13 章で語られる難破船エピソードを描出した直後に、14～16 章のほとんどを大胆にカットする形でページが構成されている。つまり、黄色で書き込まれた“CHUNG CHUNG”という擬音語とともに、コマを重ねる形で描かれるページ下部のみが、蒸気船との衝突を語る 16 章の場面ということになる。CIでは自由の身を想像して高揚するジムや逃亡奴隷を追う小舟との邂逅が描かれていたが、本書ではそのような



図版 2-1



図版 2-2



図版 2-3

16章の本筋は一切描かれな。ケアロの通過が既成事実であるかのように、“Later that night, we got back on our raft and set out for a town far away called Cairo.”と一番下の囲みで説明されるだけである。本書で説明的叙述を語るためにデザインに工夫を凝らしていた囲みは、1人称の語り手であるハックの独り言や内面を語る装置として十分機能するはずだ。にもかかわらず、原著に充満していた「考えなしであったことを考えている」ハックの内面の声の描出は一切ない。

では、本書が描こうとするものは何か。コマ配置・彩色・枠線をはみ出す人物描写方法など、絵である利点をフル活用して冒険活劇を生き生きと視覚的に表現することに尽きる。逃亡奴隷ジムとの旅で生まれるハックの葛藤や内面の変化は、やはり本書の射程に入って来ない。したがって、原著31章の物語最大のクライマックスも大胆に省略される（図版2-3）。

CIは黄色く塗りつぶされた説明的叙述“A few days later, the duke and I went ashore. A while later we met the king. They started to fight and I went back to the raft.”で済ませていたが、本書では3コマを使ってより丁寧な絵として描出されている。しかしこのページでなによりも真っ先に目に飛び込んでくるのは、勢よく走るハックの姿であり、人物の動きをコマからはみ出して表現する本書の特徴とその描写方法の効果がよく現れている。ハックは、王様と公爵が喧嘩している間に、ジムと二人で逃げようとする。原著で“I lit out, and shook the reefs out of my hind legs, and spun down the river road like a deer — for I see our chance

(340)”と描写されていた、ハックが「鹿のように」飛び跳ねながら全速力で筏に戻ろうとしている様子が描出されている。筏に戻ったハックがジムの不在に気づき、道端で出会う少年に問いかける場面を2つのコマで描くのは *CI* と同じだが、少年への問いかけが “Have you seen a strange-looking slave?” となっている。1944年に出版された *CI* が “nigger” を “negro” に書き換えた事情については先に見た通りだが、2010年出版の本書ではより慎重に “slave” と言い換えている。2011年に “nigger” を “slave” に置き換えた新版が世に出たことを思えば、“nigger” はおろか “negro” も子供向け図書として不適当と判断とされたのだろう。

いずれにしろ1で検証した *CI* と同様に、ジムが売り飛ばされたとハックが知った後の展開——ワトソン夫人に手紙を書く・筏の上で「考え続ける」・地獄へ行く決心をして手紙を破り捨てる——は全て省略される。冒険活劇として『ハック・フィン』を描き直す本書として当然の取捨選択である。ハックの内面描写を省略した代わりに描かれるのは、*CI* では省略されていた原著16章後半部の悪辣な公爵との再会場面である。やはり本書の表現技法上の特徴——枠からはみ出す人物描写・斜めにカットされたコマの枠線・コマの重なり——が効果的に活用できるからである。16章の何が描かれ何が描かれぬか、本書ではより明確になる。ハックのダイナミックな心の動きの再現は、コミックス・フォーマットの表現技法にそぐわないことが再認識されるのである。

おわりに

小説 *Adventures of Huckleberry Finn* がコミックとグラフィック・ノベルでどのように描き直されているか、16章と31章の再現の様子に焦点を合わせて検証してきた。本稿で論じた二冊は、コミックス・フォーマットに載る形でデザインされ視覚化されたものであり、アメリカン・コミックスまで源流を辿れる。冒険活劇として『ハック・フィン』を捉えるのは、読書の入り口として子供たちを誘うに十分な役割を果たすだろう。Classics Illustrated のコミックや *Campfire* のグラフィック・ノベルは教育的配慮に基づいて制作されたものであり、両書には子供向けの「お勉強」要素が最後に詰め込まれている。

Classics Illustrated にはマーク・トウェインの簡単な伝記が1ページ、ディスカッションのためのトピックス6つと『ハック・フィン』出版前後の時代背景説明を合わせて1ページ、つまり文字だけで埋め尽くされた見開きページが最後に控えている。これらは Jon Brooks が “Additional material” として執筆したものと思われ、本書見返しの書誌情報にもクレジットされている。それはそれで必要な配慮だが、果たしてどれほどの子供がこれらの文字テキストを読むのだろうか。さらに言えば、ディスカッション・トピックス

の選定も、ハックの心の動きや良心に関する葛藤を問うものは見当たらない。かろうじて宗教の役割について考えを促すトピックが当てはまるのみである。

一方 Campfire のグラフィック・ノベルでは、最後の見開きページで「19世紀アメリカの奴隷制度」の題のもとに4つのミニ・コラムを集めている。こちらは文字テキストだけではなく一定のデザインが施されている。「ミシシッピ川の蒸気船」「綿栽培プランテーション」「地下鉄道（筆者注：逃亡奴隷を助けるための地下組織を鉄道に擬えていた当時の隠語）」「奴隷制廃止」とバランスの取れたミニ・コラムそれぞれにイラストが添えられている。だがやはり、ハックの内面に巻き起こっていた心の動きを推測させるような手ごかりは与えられていない。

コミックやグラフィック・ノベルは冒険活劇を描くのに相応しい媒体であり、コミックス・フォーマットはそれを最大限に引き出す仕掛けであった。次稿では『ハック・フィン』のもう一つの読みどころであるハックの心の動きを描き直し、視覚化を試みたマンガ・フォーマットによる二冊の『ハック・フィン』——*Twain's The Adventures of Huckleberry Finn: The Manga Edition* (New Jersey: Wiley Publishing, 2009) と *Manga Classics: Adventures of Huckleberry Finn* (Ontario: Manga Classics, 2017) を論じていきたい。

《注》

- (1) <http://www.ala.org/advocacy/bbooks/top-100-bannedchallenged-books-2000-2009>
- (2) <http://www.ala.org/advocacy/bbooks/frequentlychallengedbooks/top10> 『ハック・フィン』と図書館を巡る問題に関しては、伊香佐和子「『ハックルベリー・フィンの冒険』とアメリカの図書館界」『図書館文化史研究』第15号、11-27（1998）も参照。
- (3) <http://www.bannedlibrary.com/podcast/2016/6/26/banned-61-the-adventures-of-huckleberry-finn-by-mark-twain> このサイトでは1885年の出版直後から2018年までの申し立てがあった地域と理由、申し立て後に決まった取り扱い方法も簡単にまとめられている。
- (4) <https://ncac.org/update/the-adventures-of-huckleberry-finn-challenged-at-manchester-high-school>
- (5) https://web.archive.org/web/20080309101033/http://www.journalinquirer.com:80/site/news.cfm?newsid=19182370&BRD=985&PAG=461&dept_id=161556&rfti=6 他の教材も読み合わせること、教員が事前に十分な事前準備をすること、希望する生徒（そして親）に代替教材を提供することなどで、『ハック・フィン』が自由に教材として読まれ、また図書館の閲覧制限を免れたケースは他にもある。（3）参照のこと。
- (6) たとえば、ブロードウェイでは1985年にミュージカル『ビッグ・リヴァー』が上演され（2003年にリヴァイヴァル）、PBSが1985年にTVドラマシリーズを制作し、ディズニー社が1993年に実写映画化している。
- (7) 椎名ゆかり「アメリカの図書館はいかにマンガを所蔵するようになったか——大衆文化の文化ヒエラルキーの変遷——」『情報の科学と技術』64巻4号、146-152（2014）<https://>

www.jstage.jst.go.jp/article/jkg/64/4/64_KJ00009328099/_pdf/-char/ja

- (8) 本稿では、アメリカン・コミックスのフォーマット——16.83cm×26.0cm、通常32ページ——に近い判型で、なおかつ全編カラー印刷されているものをコミックス・フォーマットとして扱う。コミックスは伝統的なアメコミ文脈に沿うものであり、次稿で論じる予定のマンガ・フォーマットは、日本マンガの影響を受けたペーパーバックの判型で白黒印刷されているもの指す。椎名の論文でも指摘されているように、何をグラフィック・ノベルと呼ぶかは読者・出版社・書店・図書館など立場によって様々であるが、本稿の2で扱うCampfire社はおそらくマーケティング戦略上グラフィック・ノベルを標榜しているものと思われる。
- (9) Classics Comic Store社が2016年に出版した第2版を本文中の使用テキストとする。なお、本来の書名では定冠詞“The”は付けられていないが、表記は以下それぞれの使用テキストに基づくものとする。
- (10) <http://www.tompstewart.com/blog/2015/10/8/so-what-kind-of-guy-was-mike-sekowsky>
- (11) Ernest Hemingway, *Green Hills of Africa* (New York: Scribner, 1935) 22. ヘミングウェイの評とその後の批評家たちの受け止めに関しては、以下の論文も参照のこと。http://repository.fukujo.ac.jp/dspace/bitstream/11470/679/1/003_上田修.pdf
- (12) Mark Twain, *The Annotated Huckleberry Finn: Adventures of Huckleberry Finn (Tom Sawyer's Comrade)*, Introduction, notes and bibliography by Michael Patrick Hearn (New York: Norton, 2001) 340.
- (13) Calvin D. Fogel, “The Etymology, Evolution and Social Acceptability of ‘Nigger,’ ‘Negro’ and ‘Nigga,’” (<https://poseidon01.ssrn.com/>)
- (14) たとえば *Farlex Dictionary of Idioms* (2015) は “say to oneself” を “To form or focus on some particular thought in one’s mind” と *McGraw-Hill American Dictionary of Idioms and Phrasal Verbs* (2002) は “say something to oneself” を “to think something to oneself” と定義している。
- (15) 本稿では2010年の初版を使用する。現在、たとえばAmazonなどで検索すると、より年齢層の高い読者を想定した表紙絵を使用した reprint 版が流通しているようである。
- (16) “Persons attempting to find a motive in this narrative will be prosecuted; persons attempting to find a moral in it will be banished; persons attempting to find a plot in it will be shot.” という文言はまったく同一だが、続く “BY ORDER OF THE AUTHOR/PER G. G. CHIEF OF ORDNANCE.” の代わりに Mark Twain と著者名が記されている。原著のユーモラスで手の込んだ告知文の作りを単純化しているが、本書を読む読者には十分に読書欲をそそる「警告」にはなるだろう。
- (17) https://marvel.fandom.com/wiki/Category:Roland_Mann/Writer および <http://comicbookdb.com/creator.php?ID=2182> 参照
- (18) <https://comicvine.gamespot.com/naresh-kumar/4040-66148/>
- (19) 先述した扉裏の見開きページのデザインでは、文字テキストと擬音語を消し、色合いを暖色系に変えている。

図版出典

- 1-1: Classics Illustrated No. 19 *The Adventures of Huckleberry Finn* (Berkshire: First Classics, 2016) 30
- 1-2: *The Annotated Huckleberry Finn: Adventures of Huckleberry Finn (Tom Sawyer's Com-*

Adventures of Huckleberry Finn はどのように描き直されてきたのか 13

rade), Introduction, notes and bibliography by Michael Patrick Hearn (New York: Norton, 2001) 343.

1-3: Classics Illustrated No. 19 *The Adventures of Huckleberry Finn* (Berkshire: First Classics, 2016) 23

2-1: *Mark Twain's The Adventures of Huckleberry Finn: The Graphic Novel* (New Delhi: Campfire, 2010) 24

2-2: Ibid. 23

2-3: Ibid. 52